

沢村龍二は、かつて日本プロ野球界を席卷したエースピッチャーだった。しかし、32歳を迎えた今、彼の輝かしい栄光は過去のものとなっていた。度重なる怪我と調子の乱れにより、ここ数年は二軍暮らしが続いていた。そして今日、ついに球団から戦力外通告を受けたのだ。

龍二は球団事務所の応接室に座り、呆然としていた。窓から差し込む夕日が彼の落ち込んだ表情を赤く染めている。

「沢村選手、申し訳ありません。しかし、球団としてはこれ以上あなたを一軍で起用することは難しいと判断しました」

球団社長の言葉が、龍二の耳に虚しく響く。

「ですが」と社長は続けた。
「我々はあなたの才能を完全に見限ったわけではありません。ある提案があるのです」

龍二は顔を上げた。
その目には僅かな希望の光が宿っていた。

「育成選手契約というものをご存知ですか？」

龍二は首を傾げた。
そんな契約は聞いたことがない。

社長は咳払いをして、おもむろに説明を始めた。
「これは最新の遺伝子操作技術を用いて、選手を若返らせる特殊な契約です。具体的には...あなたを10歳の少女の姿に変えるのです」

龍二の目が驚きで見開かれた。
「な...何ですって？」

「そうです。
あなたを10歳の少女に変え、野球の基礎から叩き直すのです。これにより、あなたの才能を最大限に引き出せると考えています」

龍二は言葉を失った。
しかし、野球以外に取り柄のない彼には、この提案を断る選択肢はなかった。

「わ...分かりました。
その契約...受けます」

翌日、龍二は球団の秘密施設に連れて行かれた。
そこで彼は、この「育成選手契約」の詳細を聞かされる。

まず、特殊な薬品を投与され、体が徐々に縮小していく。
それと同時に、遺伝子操作により体の構造が女性化していく。
この過程には約1週間かかるという。

龍二は恐怖と期待が入り混じった複雑な心境で、ベッドに横たわった。
看護師が点滴を刺し、薬液が体内に流れ込む。

最初の変化は2日目から現れ始めた。
体毛が薄くなり、肌がなめらかになっていく。
筋肉が徐々に萎縮し、体つきが細くなっていった。

3日目には身長が急激に縮み始めた。
170cmあった身長が、150cm程度まで縮んでいく。
同時に、胸に小さな膨らみが現れ始めた。

「くっ...ああっ...」龍二は変化の痛みと快感に呻いた。
体が縮むにつれて、感覚が鋭敏になっていくのを感じる。
特に、胸と股間の感覚が強くなっていった。

4日目、龍二の体はすっかり少女のものになっていた。
140cm程度の身長、ふくらみかけの胸、細い腰。
そして股間からは、かつての男性器が消え、代わりに柔らかな割れ目が形成されていた。

「はぁ...はぁ...」龍二、いや今や龍子と呼ぶべき彼女は、自分の新しい体に戸惑いながら、鏡に映る姿を見つめていた。
長い黒髪、大きな瞳、あどけない表情。
そこにいるのは紛れもなく10歳の少女だった。

「これが...僕...私の新しい姿...」

龍子は小さな手で自分の体を撫で回した。
胸に触れると、ビクッと体が跳ねる。

「んっ...♡」

股間に手を伸ばすと、そこはすでに湿り気を帯びていた。

「あっ...ああっ...♡♡」

かつて経験したことのない快感が全身を駆け巡る。
龍子は戸惑いながらも、その新しい感覚に溺れていった。

1週間が経ち、変身の過程が完了した。
龍子はベッドから降り、おずおずと歩き始めた。

「ふらふら...する...」

小さな体での歩行にまだ慣れない。
そんな彼女に、医師が告げた。

「さあ、沢村さん。
これからあなたは『沢村さくら』として、小学校に通うことになります。
そこで基礎体力を養いながら、少年野球でも経験を積んでもらいます」

さくらは驚いて声を上げた。
「え？ 野球はまだいいとして、学校にも!？」

しかし、これが契約の内容だった。
さくらは不本意ながらも頷くしかなかった。

こうして、元プロ野球選手の第二の人生が始まった。

少女の体で味わう新たな経験の数々が、彼女をどこへ導くのか。
それは誰にも分からなかった。

さくらは小学校の校門の前に立ち、深呼吸をした。
かつてのエースピッチャーが今や小学5年生として教室に座ることになる。
その状況の滑稽さと屈辱に、さくらは歯ぎしりをした。

「行くぞ...」

小さな声で自分に言い聞かせ、さくらは校門をくぐった。
校庭では朝の集会が行われており、整列した児童たちの中に紛れ込む。
周囲から好奇の目が注がれるのを感じ、さくらは顔を赤らめた。

「あれ、新しい子？」
「転校生かな？」
「なんか小さくない？」

ささやき声が聞こえてくる。
さくらは必死に平静を装ったが、内心では激しい怒りと屈辱感が渦巻いていた。

朝礼が終わり、さくらは5年2組の教室に向かった。
教室に入ると、クスクスと笑い声が聞こえる。

「ねえねえ、転校生だって。
なんか幼くない？」
「ほんとだ、4年生くらいに見えるよね」

さくらは顔を真っ赤にしながら自己紹介をした。

「さ、沢村さくらです...よろしく...」

かつての低くハスキーな声は消え、高くか細い声に変わっていた。
それだけでも十分に屈辱的だったが、さらに追い打ちをかけるように担任の先生が言った。

「さくらちゃんは身体が小さいので、みんな優しくしてあげてくださいね」

さくらは拳を握りしめた。
プロ野球選手として鍛え上げた精神は健在だったが、今の自分にはそれを表現する術がなかった。

授業が始まり、さくらは必死に集中しようとした。
しかし、小学5年生の授業内容は、野球しかしてこなかった彼女にとってはあまりにも難しすぎた。
黒板に書かれた漢字や計算問題を見ても、まるで意味が分からない。

「さくらさん、この問題を解いてみてください」

先生に指名され、さくらは震える足で黒板の前に立った。
問題は簡単な分数の足し算だったが、さくらにはそれが天文学的な難問に思えた。

「えっと...あの...」

さくらは黒板の前で固まってしまった。

冷や汗が背中を伝う。
周囲からはクスクスと笑い声が聞こえてくる。

「さくらちゃん、できないの？」
「こんな簡単な問題も解けないの？」

からかうような声に、さくらは顔を真っ赤にした。
かつては150km/hの剛速球を投げ、打者を翻弄していた自分が、今は分数の計算すらできない。
この現実の落差に、さくらは激しい屈辱感を覚えた。

「ごめんなさい...わかりません...」

小さな声で謝罪し、さくらは席に戻った。
先生は心配そうな顔で言った。

「さくらちゃん、放課後に補習をしましょうね」

その言葉に、教室中から笑い声が起こった。
さくらは机に突っ伏し、涙をこらえるのに必死だった。

休み時間、さくらは一人で教室の隅に座っていた。
周りの子供たちは元気に遊んでいるが、さくらにはその輪に入る勇気がなかった。

そんなさくらに、クラスメイトの女の子たちが近づいてきた。

「ねえねえ、さくらちゃん。
一緒に遊ばない？」

さくらは戸惑いながらも、頷いた。
しかし、その「遊び」は予想外のものだった。

「じゃあ、さくらちゃんがお人形ね！」

女の子たちはさくらを取り囲み、その髪を触ったり、服を直したりし始めた。

「わっ、ちょっと...」

さくらは抵抗しようとしたが、小さな体では女の子たちを押し回すことができない。

「かわいい～！本当にお人形みたい！」
「ねえ、この服着せてみよう！」

女の子たちは楽しそうにさくらをいじくり回す。
さくらは顔を真っ赤にしながら、この屈辱的な状況に耐えていた。
かつてのエースピッチャーが、今や女の子たちのお人形遊びの道具になっているのだ。

「やめて...ください...」

さくらの小さな抵抗の声は、女の子たちの歓声にかき消されてしまった。

昼休み、さくらは一人で校庭に出た。
ふと、野球のグラウンドが目に入る。
懐かしさと切なさが胸に込み上げてきた。

さくらは周りを確認し、誰もいないことを確認すると、グラウンドに向かった。
ボールとグローブを手に取り、ピッチングの動作を始める。

「くっ...」

小さな体では、かつてのフォームが取れない。
それでも、さくらは必死に投球を繰り返した。

「おい、その豆粒ちゃん！」

突然の声に、さくらは驚いて振り返った。
そこには野球部の男子たちが立っていた。

「ボール、投げられる？」

さくらは意気込んでマウンドに向かった。
しかし、小さな手でボールを握ると、不安が襲ってきた。
全力で投げても、ボールは途中で力尽き、バッターボックスの手前でポトリと落ちた。

周りから笑い声が起こる。

「なにあれ？女の子のくせに」
「野球やめたほうがいいんじゃない？」

さくらは悔しさで震えた。
かつては150km/hを超える剛速球を投げていたのに、今はこの有様だ。

「おいおい、そんな豆つぶみたいな体で野球なんかできるわけないだろ」年上の男子が嘲笑う。
「お人形遊びでもしてろよ」

さくらは目に涙を浮かべながら、必死に抗議した。

「ぼ、僕は...私は野球が上手いんだ！昔は...」

しかし、幼い少女の姿で必死に抗議するさくらの姿は、周りの子供たちの笑いを誘うだけだった。

「昔はって、何歳だよ？」
「こいつ、頭おかしいんじゃない？」

さくらは地面に膝をつき、悔し涙を流した。
プロ野球選手として輝かしい経歴を持っていた過去が、今や誰にも信じてもらえない妄想のように扱われる。

そこへ、野球部の顧問の先生がやってきた。

「何をしているんだ？」

状況を把握した先生は、さくらに優しく声をかけた。

「さくらちゃん、野球は危険だからやめなさい。
君には向いていないよ」

その言葉は、さくらの心に深い傷を残した。
かつてのエースピッチャーが、野球を諦めろと言われる。
これ以上の屈辱はなかった。

「はい...わかりました...」

さくらは小さな声で答え、グラウンドを後にした。
背中には、野球部の男子たちの嘲笑が突き刺さる。

放課後、さくらは重い足取りで帰路についた。
今日一日の出来事が頭の中でぐるぐると回る。
子供たちの嘲笑、先生たちの過剰な気遣い、そして何より、自分の無力さ。

「くそっ...」

さくらは小さな拳を握りしめた。
しかし、その手は以前の自分のものではない。
小さく、か細い手だ。

家に帰ると、さくらは鏡の前に立ち尽くしていた。
そこに映るのは、紛れもなく10歳の少女の姿。
長い黒髪、大きな瞳、まだあどけなさの残る顔立ち。
かつての自分の面影は微塵もない。

「これが...本当に僕なのか...」

震える手で自分の体に触れる。
平らな胸、細い腰、そして...股間。
そこにはもはや、かつての男性器はない。

「はあ...んっ...♡」

思わず漏れた吐息に、さくらは驚いた。
股間を触ると、そこはすでに湿り気を帯びていた。

「あっ...ああっ...♡♡」

かつて経験したことのない快感が全身を駆け巡る。
さくらは戸惑いながらも、その新しい感覚に溺れていった。

「はあ...はあ...♡♡♡」

小さな指が秘所をまさぐる。
その度に、電気が走るような快感が全身を貫く。

「ああっ！だめっ...イっちゃう...♡♡♡」

さくらは初めての絶頂を迎えた。
全身が痙攣し、意識が遠のいていく。

「はあ...はあ...」

絶頂の余韻に浸りながら、さくらはゆっくりと目を開けた。
そして、その瞬間、激しい後悔の念が押し寄せてきた。

「な...何てことを...」

さくらは自分の手を見つめた。
たった今、この手で自分の体を弄んだのだ。
しかも、女の子の体で。

「ああっ...！」